



掛川市



人生 100 年

時代構想

～誰もが主人公になれる社会を目指して～



掛川市



はじめに

日本の平均寿命は緩やかに延び続けており、今後も更なる延びが期待されるなど、人生 100 年時代はすぐそこまできています。こうした変化に伴って、人の生き方をはじめとして、社会の様々な仕組み、自治体の施策などを、改めて見つめ直していく必要があると考えます。

掛川市では、これからの人生 100 年時代を見据えて、市民の皆さんに向けての「人生 100 年時代の生き方・暮らし方」と、今後の掛川市と地域社会の視点となる「人生 100 年時代の掛川市と地域社会」の 2 つを柱とする『掛川市人生 100 年時代構想』をまとめました。

「人生 100 年時代の生き方・暮らし方」では、市民の皆さんのより良い生き方・暮らし方の参考としていただくため、3 つの要素「健康」「学び」「働き」について、それぞれの要点、人生各ステージでの目標や取り組みをまとめたほか、「人生 100 年時代の掛川市と地域社会」では、様々な主体がまちづくりを進める着想点ともなる、これからの時代に求められる 9 つの視点をまとめました。

この構想は、全国の自治体として、初めての「人生 100 年時代構想」となります。

新しい令和の時代がはじまり、市民の皆さんがこれらを参考とされ、豊かな人生の構築につなげていただくとともに、掛川市においてもこの構想を踏まえて、希望があふれ、誰もが主人公になれる社会を目指した取り組みを進めてまいります。

結びに、本構想の策定にあたり、ご意見ご助言をいただきました政策アドバイザー並びに有識者の皆様に、心からお礼を申し上げます。

掛川市長 松井 三郎

— 目 次 —

序 章	1
さまざまな仕事が生みだせる社会を ～人生 100 年時代の課題～ 内山 節	
1 人生 100 年時代に向かう社会と構想の目的	3
2 日本、掛川市の現状	5
(1) 日本の現状	
(2) 掛川市の現状	
3 市民の皆さんに向けて 「人生 100 年時代の生き方・暮らし方」	8
(1) 健康 ～生涯お達者・すこやかな心と体～	
(2) 学び ～教養を身につけ、生涯学び続ける～	
(3) 働き ～生涯現役、役立ち合う多様な働き～	
4 掛川市・地域社会の取り組み 「人生 100 年時代の掛川市と地域社会」	15
(1) 地域の特性を大切に育み、魅力に変える	
(2) 新しい公共モデルとなる協働のまちづくり	
(3) 未来を担うこどもたちに向けての取り組み	
(4) 地域循環共生圏やSDGsを目指した取り組み	
(5) 多極ネットワーク型コンパクトシティ	
(6) 産業のイノベーションが継続的に起こるまち	
(7) 多様性を認め合う地域社会の構築	
(8) 地域包括ケアシステムの拡充、孤独社会への対策	
(9) 広域連携やスマート自治体の取り組み	
5 資料	23
(1) 掛川市政策アドバイザー・学識経験者名	
(2) 掛川市政策アドバイザー・学識経験者の主な意見の抜粋	
(3) 参考文献	

さまざまな仕事が生みだせる社会を
～人生 100 年時代の課題～
内山 節

人間だけではなくすべての生き物は、誕生してから幼年期、少年期、青年期、中年期、老年期を過ごしこの世を去る。このそれぞれに、その時期に適した生き方がある。

今日の日本では、人生 100 年時代を迎えたといわれている。確かに多くの人が、昔よりも長生きをするようになった。だが、本当は、100 年という数字に惑わされる必要はないのだと思う。なぜなら幼年期から老年期へと変遷していく人生自体は、変わってはいないからである。とすると、いま何が問題なのか。それは、誰もが経験する人生の変化と今日の社会のあり方が、調和できなくなっているところにある。

いまの時代を生きている私たちには、今日の社会のあり方はごく当たり前のものに感じられる。しかし長い歴史のなかでみれば、現代とはかなり「異常」な社会をつくっている。たとえば今日の多くの人にとっては、働くことは雇用されることになっているが、このようなかたちが一般化したのは最近の半世紀くらいのことだといってもよい。それまでは農民であれ、商人や職人であれ、家業を受け継ぎ、あるいは新しい家業をつくりだしていくのが、多くの人たちにとっての働くということだった。社会のあり方をみても、共同体を基盤にしてつくられているのがかつての社会のかたちで、共同体が壊れ、人間が個人として生きるようになったのも明治以降に現れてくる変化である。さらには核家族というかたちが一般化したのもこの半世紀のことで、働き方をみても、社会や家族のかたちをみても、長い歴史からみれば、いまの時代は特殊な時代を形成しているといってもよいのである。

ところがこの現在のかたちが、はやくも限界を示すようになってきた。家業的な仕事のつくり方なら、一人一人に合った働き方も創造できるが、雇用された労働では、定年によって一斉に労働が終了してしまう。しかも雇用されている間は、青年期や中年期と同じように働かなければならない。今日では 60 代の多くの人たちも何らかのかたちで働くようになってきたが、仮に 70 歳で仕事を終え、100 歳まで生きるとすると、仕事をもたない人生が 30 年間もつづいてしまう。

雇用された働き方では、ほとんどの人が、青年期の働き方、中年期、老年期の働き方を、労働の質としてつくりだすことができなかったのである。また共同体を失った個人の社会では、東京などの大都市で顕著のように、孤立した高齢者を大量に生みだすようになった。核家族という戦後的家族のかたちも、ときに高齢者の孤立を促進する要因になっている。このような状況を生みだした原因は、人生が 100 年になったところにあるのではなく、すべて

の世代の人たちが社会のなかで役割をこなしながら、自分の体力や能力を活かした生き方をするには、今日の社会の構造が適さなくなったことの方にあると考えた方がよい。

とすると現在の課題は、誰もが役割をもって生きる社会のあり方を模索することであり、さらには雇用にとらわれない仕事の仕方を、さまざまなかたちで創造することであろう。とともにそのヒントが、伝統社会のなかにあることに今日の人々は気づきはじめた。

近代以前の伝統社会では、仕事は経済的な仕事だけではなかった。自分たちが食べる作物をつくり、ときには山や海に山菜や茸の採取、漁労などに出かけ、さらにそれらを料理する仕事が生活の基盤にはあった。そうやって生まれたものは近隣の人たちにも分けられ、それは地域社会の関係性づくりにも役立っていた。誰かが困っていれば応援する仕事もあったし、祭りや年中行事のやり方を伝えていく仕事の多くは、高齢者の経験がものをいった。いろいろなトラブルをうまく収めていくのも、高齢者の仕事だった。伝統社会には経済的な価値を生む仕事以外にも、暮らしをつくり、地域社会を守っていく多くの仕事があり、さらには経済的な仕事でも、若い人たちが何らかの理由で行き詰まったときにそれを解決してあげる役割も、高齢者の仕事だった。

働くこと、暮らすこと、自律的な地域社会をつくることが一体のものとして展開し、それが高齢者の働く世界をもつくりだしていたのである。それが伝統社会のかたちだった。

とすると今日の課題は、いま述べたような意味で、たえずさまざまな仕事が生まれていく地域社会の創造にある。もちろんそれまでの経験を活かして、自分の体力にあった働き方ができる経済的な仕事が創造できることはすばらしいが、働くとは役割をこなすということでもある。とともに誰もが主人公になれる社会とは、誰もが社会のなかで有益な役割をもって生きる社会のことであり、そういう社会のあり方が衰弱してしまったことにこそ、今日の問題があるといってもよい。

とすると、人生 100 年時代の課題は、このことのなかにあるのだろう。



1 人生 100 年時代に向かう社会と構想の目的

◆ これから訪れる未来

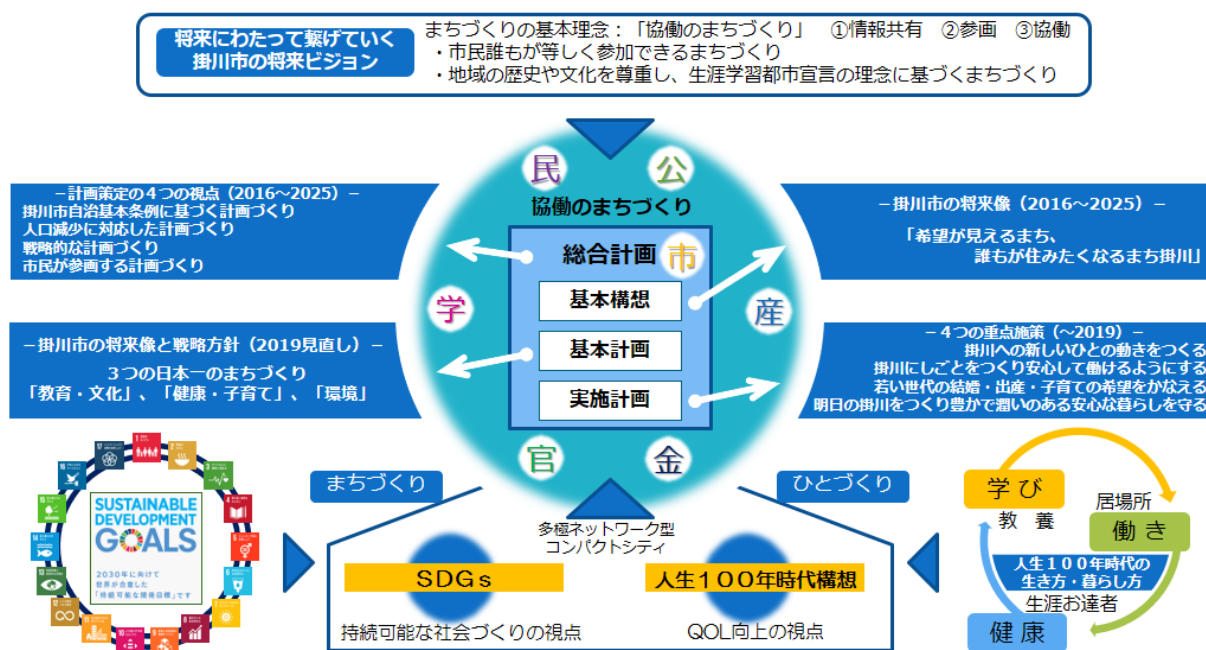
- ・ 『人が想像できることは、必ず人が実現できる（ジュール・ヴェルヌ）』。その言葉のとおり、私たち人類は思い描いてきた未来を、次々と現実のものとしてきました。今ではなくてはならないスマートフォンも、1985 年にショルダーバッグ型の携帯電話が登場し、使用者のニーズにあわせて、小型化、高機能化を重ね、現在では I o T を代表する汎用媒体として限らない能力を持つまでになっています。
- ・ これらをはじめ、私たちを取り巻く先進的科学技術は、今や「Society 5.0」に向けての変革期の入り口に立っています。「Society 5.0」には、I o T や A I、クラウド、ドローン、自動走行車・無人ロボットなど、最新テクノロジーの活用により、経済発展と課題解決を両立させて、すべての市民を幸せにする可能性を秘めています。
- ・ 一方、我が国は、急速に進む少子高齢化を背景に、本格的な人口減少社会に突入しています。これに加え、地方に比べて合計特殊出生率が低い東京圏への人口一極集中が、日本全体の人口減少に一層の拍車をかけています。人口減少社会は、単に人口が減ることに留まらず、人口構成の変化に伴って、様々な課題が複合的、連鎖的に発生し、それが悪循環となって地域が変容する社会です。
- ・ こうした社会は、国のみならず、自治体に、地域のコミュニティに、そして我々一人ひとりに多様で複雑な課題をもたらし、それぞれの将来を描きづらいものとしています。

◆ 掛川市が掛川市であり続けるために

- ・ 人生 100 年時代に向かつて、市民一人ひとりが長生きとなり、掛川市全体として高齢化が進んできている中、これまで築き上げてきた様々な制度や仕組みの絶え間ない改善が求められています。
- ・ 掛川市においても、近い将来、生産労働人口の減少から税収減が見込まれる一方、社会保障の維持や社会インフラの維持改廃などのため、今まで以上に支出が求められてきます。縮減していく財政状況の中で「選択と集中」を繰り返し、より戦略的な行政運営を行う必要があります。
- ・ 価値観が多様化していく社会においては、それに対応した新たな施策が求められてきます。新たな社会課題の対応が求められる中で、行政だけでなく、市民、企業、地区まちづくり協議会、市民活動団体など多様な主体が、自らの住む社会をより良くするための活動を、積極的に行っていく必要があります。そのためには、組織を構成している市民が自立し、主体的に行動していくことが望まれます。

◆ 構想の目的

- ・ 掛川市では、長くなった人生に合わせて、人の生き方、社会システム、自治体の施策について、改めて見直していく必要があると考え、「掛川市人生 100 年時代構想」をまとめました。
- ・ この構想は、1 つ目として市民の皆さんに向けての「人生 100 年時代の生き方・暮らし方」と、2 つ目として掛川市・地域社会の視点としての「人生 100 年時代の掛川市と地域社会」についてまとめています。
- ・ 1 つ目の市民の皆さんに向けての「人生 100 年時代の生き方・暮らし方」では、有識者や政策アドバイザーの方々からお伺いしたご意見をもとに、人生 100 年時代における 3 つの要素である「健康」「学び」「働き」に着目し、その目標や人生の各ステージでの取り組みをまとめたものです。これらを市民の皆さんが参考とされ、人生 100 年時代におけるそれぞれの人生を、より豊かで充実したものとしていただければ幸いと考えています。
- ・ 2 つ目の掛川市・地域社会の取り組み「人生 100 年時代の掛川市と地域社会」では、掛川市の将来像である「希望が見えるまち、誰もが住みたくなるまち掛川」を実現するために、これからの時代に求められる 9 つの視点についてまとめました。人生 100 年時代に向かう中で、様々な主体がまちづくりを展開していく上での着想点としてもらうほか、掛川市総合計画の改定にも反映していくものです。



2 日本、掛川市の現状

(1) 日本の現状

① 長くなった平均寿命と若返った現代人

- ・ 日本の平均寿命が 50 歳を超えたのは 1947 年です。以降、日本の平均寿命は延び続け、2017 年の平均寿命は女性 87.26 歳、男性 81.09 歳¹と過去最高を更新し、世界 3 位²となっています。約 50 年後の 2065 年には、女性が 91.35 歳、男性が 84.95 歳になる³と予想されています。
- ・ 国の人生 100 年時代構想会議委員でもあるイギリスのリンダ・グラットン教授などによる研究では、2007 年に日本で生まれた子どもの 50% が 107 歳まで生きると推計されています。
- ・ 良質な医療体制や栄養、衛生環境の改善、健康意識の高まりから、現在の高齢者は 10 年～20 年前と比較し、歩行速度、見た目等 5～10 歳程度若返っています⁴。

② 低い主観的幸福度

- ・ 日本は世界第 3 位の経済大国ですが、国連の世界幸福度報告では 58 位、G7 の中で主観的幸福度は最下位となっています。
- ・ 長くなった人生において、経済的な豊かさよりも、精神的な豊かさを求める傾向が強まっています。

③ 急速に進む少子高齢化、国力低下

- ・ 日本は先進国の中で最も速いスピードで少子高齢化が進んでいます。65 歳以上の人口の割合を示す高齢化率は、2017 年 10 月 1 日現在で日本全体では 27.7%⁵です。
- ・ 日本国内の 2018 年の出生数は 91 万 8397 人、死亡者数は 136 万 2482 人で、出生数から死亡者数の差を示す自然減は約 44 万人⁶と、おおよそ磐田・袋井・掛川・菊川・御前崎の人口が一年で消えており、年々自然減が大きくなっています。
- ・ 急速に進む少子高齢化に対応するため、受益と負担のあり方をはじめとして、社会システムそのものを見直す必要が生じてきています。
- ・ 2018 年の IMF のレポートでは、人口減少等の影響によって、今後 40 年で日本の GDP は 25% 減少すると試算されています。

¹ 平成 29 年度簡易生命表の概況（厚生労働省）

² 世界経済フォーラム（2017/12/26）

³ 国立社会保障・人口問題研究所

⁴ 高齢者に関する定義検討ワーキンググループ報告書（日本老年学会・日本老年医学界）

⁵ 平成 30 年度版高齢社会白書（内閣府）

⁶ 平成 30 年人口動態統計の年間推計（厚生労働省）

10年若返った現代人

栄養、衛生環境の改善や良質な医療が受けられるようになった

歩行速度	65－69歳	1997年1.29m/秒
		2006年1.43m/秒
	75－79歳	1997年1.17m/秒
		2006年1.29m/秒

長くなった人生

日本の平均寿命は女性87.26歳、男性81.09歳
掛川市では、女性87.5歳、男性81.6歳（2017年）

2007年に日本で生まれた子どもについては、
107歳まで生きる確率が50%もある
（リンダ・グラットン著書「ライフシフト」より）

前例の無い変化の時代

少子化、超高齢社会、多死社会、グローバル化
など様々な変化の時代

1990年の社会保障費11.5兆円が2019年には34
兆円に増えている
IMFのレポートでは、今後40年でGDPは25%減
少すると試算されている

低い主観的幸福度

世界幸福度ランキング
（国連世界幸福度報告書より）

2017	日本51位／157国	G7中最下位
2018	日本54位／157国	〃
2019	日本58位／158国	〃

（２） 掛川市の現状

① 掛川市の人口構成等

- ・ 掛川市の人口構成についても、国と同様、少子高齢化が進行しています。掛川市の2017年10月1日現在の高齢化率は26.0%です。
- ・ 生産年齢人口の減少による人手不足などを背景として、近年は、外国人人口の増加が続いており、2019年4月現在4,447人（前年同月比：417人増）の外国人が住んでいます。
- ・ 掛川市の平均寿命についても伸び続け、2015年は男性81.6歳、女性87.5歳⁷となっており、全国平均の男性80.79歳、女性87.05歳を上回っています。

② 掛川市の医療福祉介護等の概況

- ・ 高齢者人口の増加などにより、医療福祉介護の需要が増加しています。例えば介護保険給付費は、平成17年度の52.3億円から平成29年度は86.9億円に上昇しています。
- ・ 在宅医療や在宅介護の必要性が高まっており、地域包括ケアシステムの中核を担う5ヶ所の「ふくしあ」により、総合的な在宅支援が行われつつあります。一方で、支援ニーズが多様化し、ニーズそのものも増加しているため、マンパワーが不足しています。
- ・ 人口10万人以上の都市において、がんの死亡率が全国で1番低い⁸という結果が出ています。

⁷ 平成27年市区町村別生命表の概況（厚生労働省）

⁸ 平成20～24人口動態保健所・市区町村別統計（厚生労働省）

③ 掛川市の市民生活

- 緩やかな景気回復や労働人口の減少等により、掛川市においても人手不足が深刻化してきています。一方で、女性の就労意欲が高まっています。
- 空き家、耕作放棄地などが増加しており、市街地、郊外、中山間地を問わず空洞化が進行してきています。
- 協働のまちづくりの中核を担う地区まちづくり協議会の活動が活発化してきており、地区の特性や実情に応じた協働のまちづくりが進展しています。
- 住みよさランキング⁹では、掛川市の住みよさは全国 124 位（812 市区中）、静岡県内では 3 位となっています。
- 市民意識調査では、掛川市が住みやすいと感じている市民の割合は、概ね 8 割前後を推移しており、高い満足度となっています。また、健康で生きがいを持った人生が送れている割合は 6 割強となっています。

⁹ 週刊東洋経済臨時増刊 都市データパック 2019 年版（東洋経済新報社）

3 市民の皆さんに向けて

「人生 100 年時代の生き方・暮らし方」

私たちは、これまで人生設計を考える場合、今までの平均寿命であるおよそ 80 年を基準として、自らの生き方・暮らし方を考えてきました。平均寿命が延び、人生 100 年時代に向かう中で、私たちは 100 年という期間を見据えて、それぞれの生き方・暮らし方を、改めて考えていく必要があるのではないのでしょうか。

掛川市では、人生 100 年時代に向けて、市民一人ひとりが、より良い生き方・暮らし方をしてもらうために、「健康」「学び」「働き」の 3 つの要素に注目しました。生涯にわたって、自立し、豊かな生活を送るためには、「働き」による生きがいや資産形成だけでなく、「健康」な心身を維持し、一生涯「学び」続けることが大切であり、それぞれの要素が相乗効果を発揮していくことが求められます。

有識者や政策アドバイザーの方々からご意見をお伺いする中で、この項では「健康」「学び」「働き」の各要素について、幼少期から高齢期の各人生ステージにおいて、何を目標とし、どのような取り組みをしていけばよいかをまとめました。

市民の皆さんには、これらの目標や取り組みを参考としていただき、長くなった人生を、生きがいを持って充実したものとされ、生涯自立し、学び続け、豊かに生きていってもらいたいと考えます。



(1) 健康

～生涯お達者・すこやかな心と体～

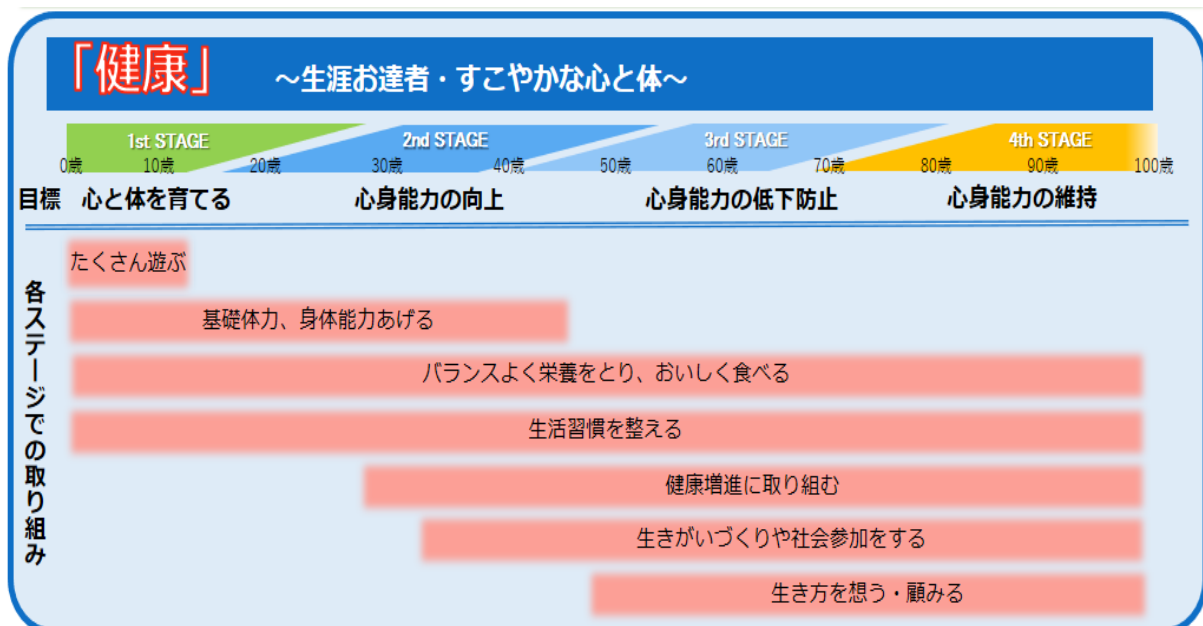
人が活動をしていく上で、「健康」な心や体はその基盤となるものです。

人生 100 年時代においては、若い頃から心身の向上を図り、健康を意識した生活を心掛けて、健康寿命を延ばしていくことが大切です。

高齢期には、積極的な社会参加や生きがいを持つことが健康の秘訣となりますが、年齢を重ねるにつれて、体力が衰え、病気になることは仕方の無いことです。自らの尊厳を保ちながら、それらを受け入れて、心や体とうまくつきあっていくことも大切です。



○各ステージにおける目標と取り組み



※上図は、「健康」のために各ステージにおいて、市民が実施したほうが良いと思われる人生 100 時代の取り組みの提案です。「学び」、「働き」においても同様です。

人生 100 年時代の「健康」においては、幼・少年期から遊びを通して豊かな人間性を育て、基礎体力の向上をはかることや、青年期には、さらなる身体能力の向上を目指すことが大切です。壮年期、老年期では、体力の維持や低下防止、介護予防に取り組み、併せて心の健康を整えていくための取り組みが重要になります。

す。

さらに、健康な体づくりの基本となる食生活では、生涯にわたって、バランス良く栄養をとり、美味しく食べることが大切となります。また、若い頃から生活習慣を整え、身体能力が衰える壮年期からは、健康増進に取り組んでいくことが求められます。

～健康における大切な視点～

① 健康長寿の重要性

- ・ 長くなった人生を、生涯自立し、豊かに生きていくためには、生涯お達者で、生きがいを持って生きていくことが大切です。
- ・ 健康には、食生活、運動、社会参加の3つの要素が重要とされています。

② まちづくりや市民活動への参加

- ・ 適度な運動と適切な食生活に加えて、生きがいを生む社会参加をすることで、それをしない高齢者と比べて長生き¹⁰であることがわかっています。
- ・ 社会参加は、個人の自主性に基づく行動で、自身の生きがい、達成感、使命感が増し、豊かな人生を形成することにつながります。

③ 健康格差の縮小を目指した生き方

- ・ 幼い頃からの生活習慣や環境が、将来の自身の健康につながっていることを理解し、若いうちから良い生活習慣に努めることが重要です。
- ・ 健康に関心な人ほど、疾病が発見されたときに重症化していることが多いため、健康に関心を持つとともに、孤立しないよう普段からいろいろな人とコミュニケーションをとることが大切です。

④ 求められる人生観

- ・ 人生の満足度を上げるため、生き方や人生の終末期のあり方について、時には身近な人と話す時間を設けることが求められます。

¹⁰ 「静岡県高齢者コホート調査に基づく運動・栄養・社会参加の死亡に対する影響について」（第58回 東海公衆衛生学会）

(2) 学 び

～教養を身につけ、生涯学び続ける～

A I やロボットなどの最新テクノロジーが身近に存在する時代となりました。

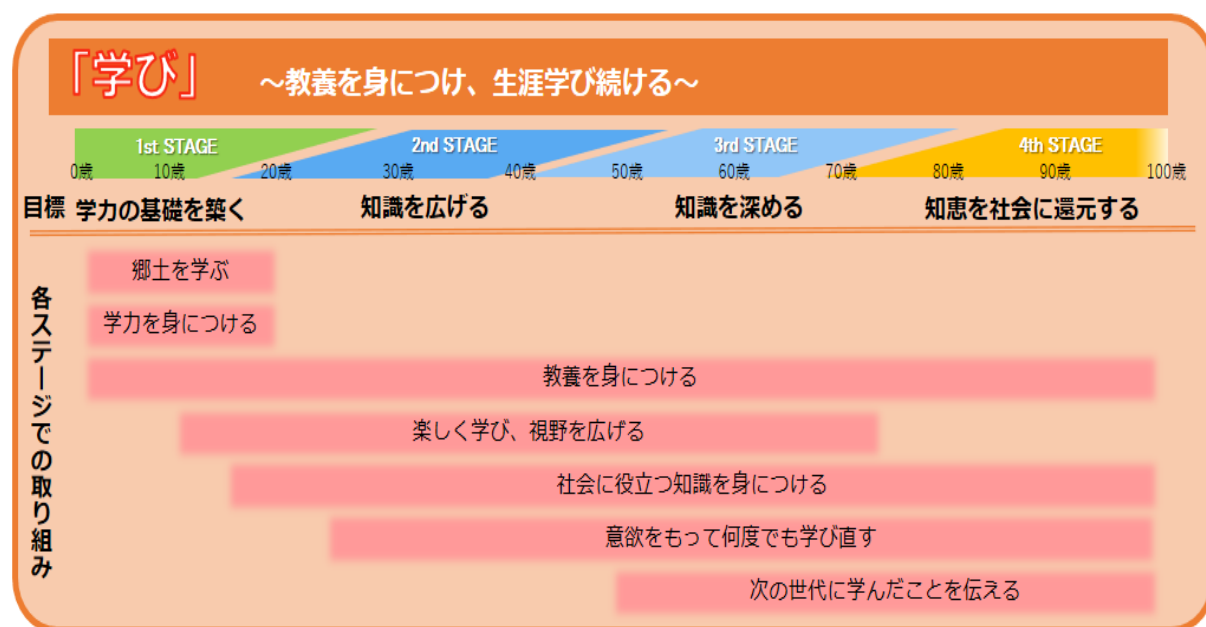
また、インターネットにより、誰でも瞬時に情報を得たり、発信したりすることができるようになり、社会には大量の情報が溢れています。

このような時代において、私たちは情報を取捨選択し、有用な情報を社会やそれぞれの暮らしに役立てていくことが求められます。

長くなった人生にあわせて、生涯にわたって「教養」を身につけ、人生を豊かにするとともに、意欲を持って自己研鑽に励み、学び直しをしていくことも重要となります。



○各ステージにおける目標と取り組み



人生 100 年時代の「学び」においては、幼・少年期に、基礎学力を身につけ、郷土をしっかりと学び、社会に出てからも、高等教育の機会や学び直しにより知識やスキルを積み上げていくことが大切です。

生涯にわたって、教養を身につけ、意欲をもって学び直しをしていくことで、

長くなった人生を豊かに過ごすにつながります。

掛川市民に根付く生涯学習は、人生 100 年時代においても必要不可欠な要素となるものです。学んだ知恵や知識を社会に還元して、豊かな社会を築いていくことも求められます。

～学びにおける大切な視点～

① 人生すべての時期での学びの重要性

- ・ これまでの「学び」は、若い頃を中心に行われていた学校での「学び」が中心でした。人生 100 年時代では、長くなった人生を豊かにし、知識やスキルを陳腐化させないためにも、人生すべての時期での学びが大切になります。

② リカレント教育¹¹

- ・ 自主学習やOJT¹²だけでなく、学び直しであるリカレント教育を受けることで、人生の幅を広げ、キャリアアップ、ネクストキャリアに役立つほか、新たな生きがい、人的ネットワークの形成につながります。
- ・ スキル、知識を高めることで、教養が醸成されます。

③ 教養を深める

- ・ 教養を深めることにより、様々な物事への興味が深まり、それに伴って人生も豊かになっていきます。
- ・ 「教養」とは、「自らの領域とは異なる他者の領域を、学び、共感する力である¹³」といわれています。今後ますます、社会が多様化・複雑化していく中で、この教養の理念はたいへん重要なキーワードとなります。

④ 地域課題に取り組む学び

- ・ 行政だけでは解決できない課題が増えていく中、地域の困りごとを自らのことと捉え、課題解決していくことが求められます。
- ・ 地域課題に取り組むには、地域のニーズを汲み取り、共感を集めながら協働で実践することが求められます。このことは、社会貢献でもあり、自らの学びとも密接に関わり、生きがいにもつながるものとなります。

⑤ 伝える

- ・ 長い人生で培ってきた知恵や知識は、生きるための必然性から積み上げられてきています。他者から求められる生きた知恵を、一人だけのものとせず、還元することで、知識のフィードバックがおき、さらなる知恵や知識の拡大が生まれ、社会の課題解決に活かされていきます。

¹¹ 経済協力開発機構(OECD)が提唱した生涯教育の一形態。社会に出てからも必要に応じて教育機関で学び直す。

¹² On the Job Training : 職場、企業内のトレーニング、企業内教育

¹³ ロバート キャンベル氏 (掛川教養講演会 2018/1/13)

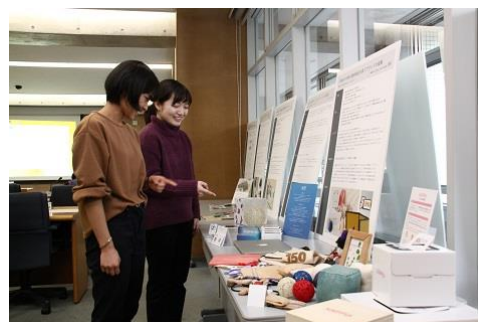
(3) 働 き

～生涯現役、役立ち合う多様な働き～

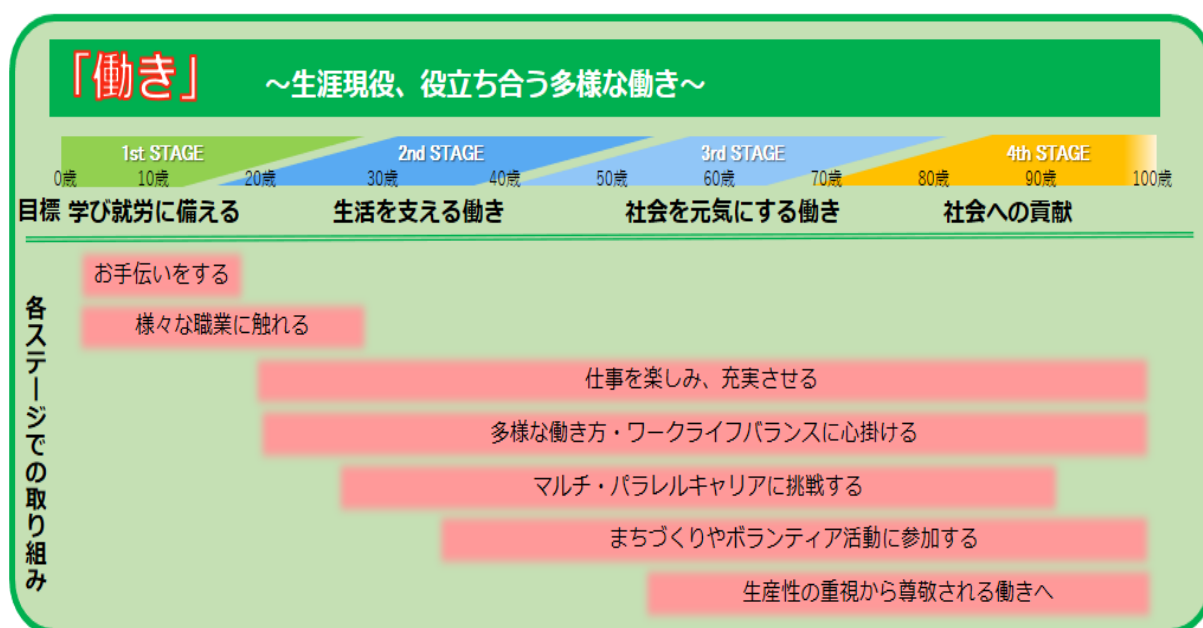
働くことは、その対価によって経済的に自立していく目的を持っていますが、一方では、社会とのつながりを保ち、人生の生きがいともなる大きな存在です。

そのような意味で、人生 100 年時代においては、生涯現役を志し、その時々の年齢に応じた多様な働き方が求められます。

将来の自らの方向性を考えながら、自らの役割やキャリアをどうしていくかについて絶えず自問自答していくことが大切となります。



○各ステージにおける目標と取り組み



人生 100 年時代の「働き」において、幼・少年期には、たくさんのお手伝いをし、様々な職業に触れることが大切となります。それによって、働くことの意義を理解し、将来の社会的な自立促進や学生期から就職へのスムーズな移行につながっていきます。

壮年期には、ワークライフバランスに心掛け、ポジティブに仕事に取り組むことが大切ですが、いくつかのキャリアを持つ働き方や、その中で身につけた能力

を社会貢献につなげるプロボノや生きがいを増やす取り組みも求められます。

老年期には、自らの体力にあわせての働きや、これまでの経験や身につけたスキルを社会や地域に還元・伝導するなど、尊敬される働きも望まれます。

～働きにおける大切な視点～

① いくつかのキャリアを持つ生き方

- ・ 生涯を通して一つの仕事に専念する働き方から、長い人生にあわせて、次の仕事であるネクストキャリアを持つことや、複数のキャリアを同時にこなすなど、いろいろな働き方が行われるようになってきています。
- ・ 社会人が専門知識やスキルを活かして、社会貢献するプロボノの活用が注目されています。
- ・ 掛川市でも、多くの企業が中途採用を行っているほか、中東遠タスクフォースセンター、シルバー人材センター、地区まちづくり協議会、市民活動団体などの多くの活躍の場があります。

② 真の働き方改革の必要性

- ・ 単に労働時間を減らし、休暇を増やすのではなく、労働の成果や質に目を向けた生産効率の向上が大切です。
- ・ どこで働いても、いつ働いてもよいなど、労働時間などではなく労働成果を重視する真の働き方改革が求められています。
- ・ 「働き」のために「健康」を犠牲にするのではなく、ワークライフバランスを意識した、ゆとりをもった働き方が「健康」を維持し、新たな「学び」をも生みます。

③ 人生後半では生産性重視の働きから尊敬される働きへ

- ・ 人生後半の価値観がお金やモノなどの物質的なものから、人からの尊敬など精神的なものに変わっていきます。人のために役立つことで自分の存在価値を高めることとなり、生きがいにつながります。
- ・ 報酬を得る「働き」だけでなく、地域や家庭の中など社会に役割や居場所があることで、孤独を防ぎ「健康」で豊かな生活が期待できます。

④ 先端技術を上手に活用した働き方へ

- ・ AIやIoTなどの先端技術を上手に活用することで、様々な課題解決や効率的な仕事の可能性が広がります。それに伴い、労働資源を新たな社会課題やビジネスモデルに充当することで、生産労働人口の減少などに対応した社会を構築することにつながります。

4 掛川市・地域社会の取り組み

「人生 100 年時代の掛川市と地域社会」

新しい令和の時代となった現在、第4次産業革命ともいわれるAIやIoTなどの技術革新が進んでおり、様々な知識や情報が共有され、新たな価値を生み出すことで、経済発展と課題解決を両立していく社会「Society 5.0」になっていくと言われています。

一方で、全国的に人口減少や少子高齢化が進む中、多くの自治体では、担い手不足や増大する社会保障への対応が大きな行政課題となっています。

掛川市では、このような社会背景に対応する仕組みづくりとして、市民、企業、行政などの様々な主体が連携し、支え合い、役立ち合う「協働のまちづくり」の取り組みを進めています。

ここでは、これからの人生100年時代における掛川市と地域社会のあり方について、9つの視点をまとめました。

（1）地域の特性を大切に育み、魅力に変える

- ・それぞれの地域が持っている歴史・文化、資源などの地域特性を大切に育み、伝承していくことにより、それらは、やがて地域の魅力になっていきます。掛川でいえば、城下町、宿場町として栄えてきた歴史・文化であり、報徳の文化であり、木の文化であり、お茶の文化などです。
- ・それぞれの地域が持っている特性を磨いていくことで、地域が光り輝くことにつながり、観光振興やそこに住んでいる人々の満足度の向上にもつながっていきます。
- ・掛川市としても、アイデンティティ（主体性・独自性）を確立し、輝いているものが数多くあるまちづくりを進めていくことが大切です。
- ・人口が減っていても地域が尽きない地域社会にしていけば、そこに住んでいる人の満足度は高まり、人が集まってくることにつながります。



■ 具体的な施策

- ・地域の魅力を磨く市民総ぐるみの観光・シティプロモーション
- ・かけがわ茶エンナーレから始まる掛川文化の創造
- ・松ヶ岡修復開始と現代版教養館構想の推進 など

（２）新しい公共モデルとなる協働のまちづくり

- ・明治以降、国主導で進められてきている全国一律の画一的なまちづくりから、社会の変化にいち早く対応し、地域それぞれ異なる課題に対応する仕組みとして「協働のまちづくり」が求められており、掛川市では平成 21 年度からこの取り組みを進めています。
- ・基礎自治体では、厳しい行財政運営が続いており、限られた財源の中で、市民、企業、NPO、行政などの様々な主体が互いの役割や責任を自覚して、市民の満足度を高める協働のまちづくりが必要とされています。
- ・今後、地域の循環共生が大切になってくる中で、掛川市では「地区まちづくり協議会」が鍵を握っており、住民自治の母体ともなり、地域自らの手による公共サービス、新しい公共モデルにもなりえます。
- ・自分たちの住む地域をそこに住む市民が正確に状況把握をすることが重要であり、地図づくり、マッピングはその一つの手段となります。これにより地域課題の正確な把握ができ、行動を起こすことにつながっていきます。



■ 具体的な施策

- ・市民、企業、地区まちづくり協議会など多様な主体によるまちづくり
- ・地域、市民の手による公共サービスの提供
- ・地域を守る共助、公助の取り組み など

（３）未来を担う子どもたちに向けての取り組み

- ・ 将来を担っていく子どもたちが意欲的に勉強や運動に取り組み、健やかに成長していってもらうため、魅力ある授業の展開や、快適な学習環境づくりをしていく必要があります。
- ・ 学校・家庭・地域が一体となって人を育てていく地域の学園化は、ひとづくりまちづくりを進めていくうえでたいへん重要となります。掛川市が進めている中学校区学園化の取り組みは、地域の結びつきを高めて地域力の向上につながるほか、子育て負担の軽減や子育てしやすい環境づくりにもなり、続けていくべき大切な取り組みです。
- ・ 郷土に誇りと愛着を持ってもらうため、郷土の歴史や文化をより知ってもらう取り組みにより、将来のＵターン就職や退職後の帰郷などにつながるほか、何よりも人生の豊かさを高める効果があります。



■ 具体的な施策

- ・ こころざしと学ぶ意欲を育てる人づくり
- ・ 市民総ぐるみによる学びの環境づくり
- ・ 歴史、文化、伝統などをつなぐ未来志向の人づくり など

（４）地域循環共生圏やＳＤＧｓの視点を入れた取り組み

- ・ 自然災害の激甚化など気候変動の影響が地球規模で広がりを見せる中で、その影響となっている温室効果ガスの削減は、全世界共通の喫緊の課題となっています。
- ・ 掛川市としても、地域資源を活かし、自立・分散型の社会を形成して支え合っていく「地域循環共生圏」を創設し、環境に負荷をかけない取り組みを行っていく必要があります。
- ・ 自治体としても、ＳＤＧｓの経済・社会・環境に関わる諸課題の解決に統合的に取り組むことは、持続発展可能な地域社会の構築につながり、引いては、地方創生や国、地球の未来につながっていきます。



■ 具体的な施策

- ・エネルギーの地産地消による地域新電力事業システムの確立
- ・持続可能な社会を目指す脱炭素社会の構築
- ・プラスチックに関する環境問題への対応 など

(5) 多極ネットワーク型コンパクトシティ

- ・人口減少や少子高齢化が進行する中でも、掛川市が持続的に発展し、豊かな自然や各地域が育んできたコミュニティ、歴史・文化、産業を今後も守るための都市構造として多極ネットワーク型コンパクトシティのまちづくりを進めていく必要があります。
- ・多極ネットワーク型コンパクトシティにより、人口減少下においても都市施設を維持し続ける拠点を確保し、多様な都市施設が集積する中心部と各拠点との移動手段を確保することにより、将来にわたって市民の生活利便性を確保していくことが求められます。



■ 具体的な施策

- ・快適な都市環境づくりの推進
- ・地域の足となる公共交通の整備・利用促進
- ・駅前西街区の利活用などによる中心市街地活性化 など

(6) 産業のイノベーションが継続的に起こるまち

- ・掛川市や地域が持続的に発展していくためには、地域経済の継続的な発展が必要です。このためには、既存の事業や商品をこれまでの延長線上で改善していくことだけでなく、新たな技術や知見を取り入れるなどのイノベーションが求められます。
- ・少子高齢化、A I や I o T などのデジタル技術の革新が進む中で、高齢化社会対応型のサービスや商品の開発、製造業のデジタル化などの社会の動きに対応した取り組み、さらには、掛川市の地域産業である農業や茶産業と結びついた商品開発も求められます。



■ 具体的な施策

- ・ 地域資源を活用した新たな産業の創出
- ・ 攻めの農業の取り組み、オリーブの産地化
- ・ 中東遠タスクフォースセンターの利活用の促進 など

(7) 多様性を認め合う地域社会の構築

- ・ 社会的に弱い立場にある、子ども、女性、障がい者、高齢者など全ての人が、自分らしく幸せに生きていくためには、一人一人が他人を思いやり、お互いを助け合っていく社会をつくっていく必要があります。
- ・ 少子高齢化が進み、深刻な労働力不足となっている日本では、外国人労働者の受け入れにかじをとっており、今後、さらなる外国人との共生や共存社会の構築が求められます。
- ・ 掛川市においても、現在 4,500 人を超える外国人が暮らし、近年、その数は増え続けており、共生社会を実現していくために、日本語教室の充実、子どもの教育支援、医療体制の整備などの対策が求められます。



■ 具体的な施策

- ・多様な生き方、能力の発揮を可能にする社会づくり
- ・多様な文化の理解促進や外国語教育のさらなる推進
- ・外国人市民への生活・教育・労働環境の整備 など

(8) 地域包括ケアシステムの拡充、孤独社会への対策

- ・既存の介護サービスだけでは高齢者を支えきれない状態になりつつある中、高齢者が介護状態になっても、住み慣れた地域で自分らしく生活を最期まで送れるように地域内でサポートし合う「地域包括ケアシステム」が重要性を増しています。掛川市でも5ヶ所の「ふくしあ」を拠点に地域包括ケア体制を構築していますが、さらなる拡充が求められます。
- ・少子高齢化の進展や未婚率の上昇などにより、一人暮らしの世帯が増え続けています。家族との生活や様々な人とのコミュニケーションは生きがいにつながっていきます。今後、一人暮らし生活者などへの孤独への対策がさらに求められていきます。



■ 具体的な施策

- ・ふくしあ機能充実による地域包括ケアシステムの充実
- ・介護予防推進の地域リーダーの育成と認知症予防対策
- ・社会資源や地域の支え合い体制の活用 など

（９）広域連携やスマート自治体への取り組み

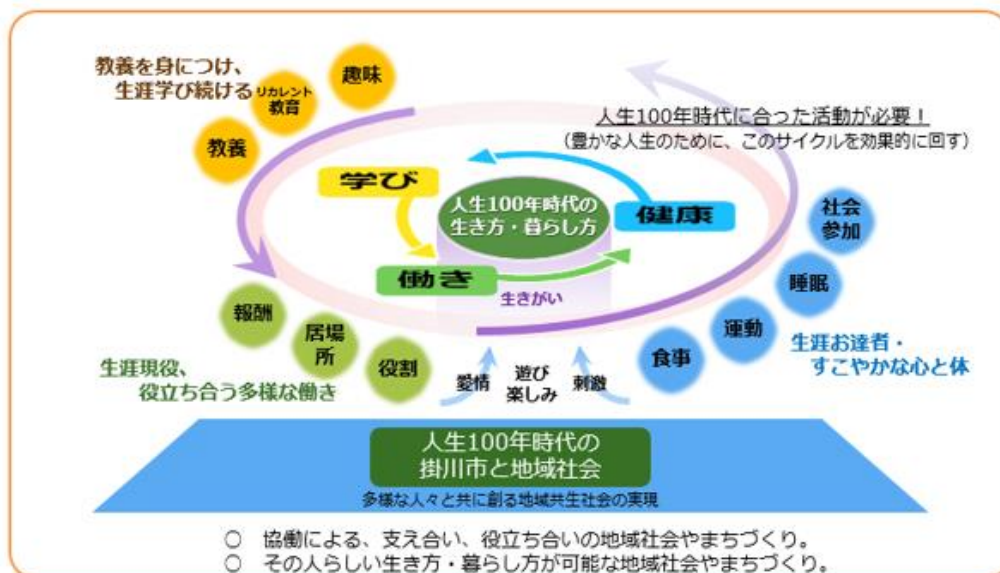
- ・ 多様化、複雑化する行政ニーズに対応するため、それぞれの自治体が単独で行政ニーズに対応するだけでなく、広域連携をすることにより経営資源を集中させて、より高度化した行政ニーズに対応し、行政経費の節減や効率化を図っていく必要があります。
- ・ A I、ロボテックスなどの技術を積極的に活用することで事務作業を自動・効率化して、職員は住民の直接的なサービス提供や企画立案業務など職員でなければ行うことのできない業務に注力して、これからの新しい行政運営を築いていく必要があります。
- ・ 掛川市では、小中学校、集会施設、スポーツ・レクリエーション施設を昭和 50 年代を中心として積極的に整備してきたことから、現在では、小中学校を中心に老朽化した施設が目立ってきています。また、道路や橋梁のインフラ施設も高度経済成長に整備したものは抜本的な老朽化対策が必要となっています。限られた財源の中、これからの公共施設は、むやみに新設に走ることなく、保有総量の適正化を図り、長く丁寧に賢く使うなどの長寿命化を進めていく必要があります。



■ 具体的な施策

- ・ 中東遠地域など既存の結びつきを活かした広域行政の推進
- ・ 戦略的な人材育成や I C T 活用による人材の高度化
- ・ 公共施設マネジメントや社会インフラの長寿命化の取り組み など

人生100年時代のイメージ



掛川市総合計画基本計画の改定に反映



5 資料

(1) 掛川市政策アドバイザー・学識経験者名（敬称略・五十音順）

○ 掛川市政策アドバイザー

- ・ 久保田 崇 （元立命館大学公共政策大学院教授、現掛川市副市長）
- ・ 熊倉 功夫 （MIHO MUSEUM 館長）
- ・ 玄田 有史 （東京大学社会科学研究所教授）
- ・ 杉浦 靖彦 （掛川市生涯学習振興公社理事長）
- ・ 富野 暉一郎 （福知山公立大学理事兼副学長）
- ・ 日詰 一幸 （静岡大学人文社会科学部長）
- ・ 鷲山 恭彦 （東京学芸大学名誉教授）
- ・ 渡邊 明 （三重大学名誉教授）

○ 学識経験者等

- ・ 石川 紀子 （日本電気株式会社）
- ・ 内山 節 （哲学者、NPO 法人森づくりフォーラム代表理事）
- ・ 西條 美紀 （東京工業大学環境・社会理工学院教授）
- ・ 島菌 進 （上智大学グリーンケア研究所所長）
- ・ 島田 由香 （ユニリーバ J H 取締役人事総務本部長）
- ・ 林 寛子 （中日新聞社取締役、掛川市文化政策審議会委員）

(2) 掛川市政策アドバイザー・学識経験者の主な意見の抜粋

○久保田 崇 氏

- ・ 地球規模の環境問題が深刻化してきており、自治体としても持続発展可能な社会構築のため S D G s の取り組みが必要となってくる。

○熊倉 功夫 氏

- ・ 長生きによって死に向かい合う時間が増えた。幸福に亡くなることについて、様々な角度から議論する必要がある。
- ・ 家族のつながり、先祖代々のつながりを続けていくことが大切。この際、住んでいるまちが活性化している必要がある。

○玄田 有史 氏

- ・ 人間は最後の瞬間まで何らかの希望を持って死に向かい合っていく生き物であり、人生 100 年時代で希望はますます重要になってくる。
- ・ 人口が減っても地域が尽きない地域社会にしていけば人は集まってくる。話題がなくなったときに、地域の存在価値がなくなる。
- ・ 地域の循環共生が大切となってくるため、掛川の将来は、地区まちづくり協議会が鍵を握る。

○杉浦 靖彦 氏

- ・ 人生は長い短いがあり、人によって今置かれている状況も違う。それでも幸せと豊かさを感じられるような人生をおくってもらいたい。そのためにどの

ようなまちとしていくかそのヒント的なものとしてまとめていく方が人々に伝えやすいのではないか。

- ・学校だけで教育や学びを行うのではなく、家庭や地域が一体となって人を育てるといったように様々な学びから人が育ち、そしてまちが育つ。地域の学園化として学校と地域が一緒になってこのような輪をひろげていくことが大切。

○富野 暉一郎 氏

- ・これからの時代、A I や I o T などの先端技術を様々な産業やまちづくりに活かしていくことが重要である。
- ・一生涯を通して一つの仕事に専念する働き方から、今後はダブルキャリア、さらにはマルチキャリアとしての働き方も増えてくる。
- ・協働のまちづくりを進めるため、地域で頑張る人にポイントを付与し還元するようなことも一案。

○日詰 一幸 氏

- ・超高齢社会への対応のため、A I や I o T の技術革新、協働による地域弱者のフォロー、高齢者の自立した生活のサポートなどを進めていく必要がある。
- ・教育面では、10 代後半から 20 代、40 代前後の社会で活躍し新たな能力を獲得する時期、60 代以降の人生充実の 3 回大学で学ぶ時代になってきた。
- ・多様化する行政ニーズに対応するため、それぞれの自治体が広域連携し、行政経費の節減や効率化を図っていく必要がある。

○鷺山 恭彦 氏

- ・主体的な学びである生涯学習を実質化していくことが求められる。
- ・至誠・勤労・分度・推譲の報徳の教えが大切であり、自立独立した市民を増やしていくことも大切となる。
- ・成熟社会では、一人一人の力量をいかに高めて発揮していくか、その連携が大切となる。

○渡邊 明 氏

- ・インターネットの活用により、様々な企業や団体を結びつけることにより、新しいビジネスが生まれる時代となった。
- ・地域の中にある多くの資源や、店舗を調査研究することにより、地域の魅力を見つけることができ、それらを今後のまちづくりに活用していくことが重要である。

○石川 紀子 氏

- ・企業においても共創の考えを取り入れている。共創をベースに、地域の方々と一緒になり考え、解決策を見いだしていくことは重要である。
- ・将来を担う子どもたちが地域に関心を持つことは、まちの大きな力となる。

○内山 節 氏

- ・本編の序章「さまざまな仕事が生みだせる社会を～人生 100 年時代の課題～」に寄稿をいただく。

○西條 美紀 氏

- ・人生 100 年時代においては、健康が最重要であり、健康長寿の延伸やその維持が最も大切となる。
- ・どうやって死にゆくかは、どのように生きていくかと同じくらい難しい問題である。人は、人とのつながりを求めており、人とつながることによって生きがいを感じる。

○島蘭 進 氏

- ・人間誰しも死に向かい合っていく時期が出てくる。ケアの仕事をされている方は、心の面やスピリチュアルの面の不足を感じており、死生観の必要性が増している。
- ・人生が長くなるにつれて、宗教的なものへの関心が強くなっている。人々の心や精神を学ぶ分野の拡大が続いていく。

○島田 由香 氏

- ・どこでいつ働いても良いなど、労働時間ではなく労働成果を重視する真の働き方改革が求められている。
- ・ポジティブ思考は、経営、まちづくり、長い人生を生きていくことにも役に立つ。

○林 寛子 氏

- ・これまで若い頃を中心に行われていた学びであるが、これからの時代は人生すべての時期での学びが重要となる。
- ・人生後半の価値観が、お金や地位より人からの尊敬になってきている。人のために役立つことで自分の存在価値を高めることとなり、社会の永続性につながる。

(3) 参考文献

- LIFE SHIFT (Lynda Gratton / Andrew Scott 著 東洋経済新報社 2017)
希望の作り方 (玄田有史 著 岩波新書 2010)
コミュニケーションデザイン (西條美紀 著 くろしお出版 2014)
未来の年表 (河合雅司 著 講談社現代新書 2017)
未来の年表 2 (河合雅司 著 講談社現代新書 2018)
日本と世界の未来年表 (世界博学倶楽部著 PHP 研究所 2018)
平成 30 年度版高齢社会白書 (内閣府編集 2018)

掛川市 企画政策部 市長政策室
436-8650 掛川市長谷一丁目1番地の1
電話 0537-21-1224 FAX 0537-21-1167